

東京音楽大学付属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	ジャワ研修(ガムラン演奏と舞踊)2017 報告-インドネシア国立芸術大学 ISIスラカルタ校における授業&公演等-
Title in another language	Report of training (Gamelan and dance) in Java 2017 - Classes at the Indonesian Institute
Author(s)	木村 佳代 (KIMURA Kayo)、樋口 文子 (HIGUCHI Fumiko)、針生 すぐり (HARIU Suguri)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 7, p. 29-40
Date of issue	2018-03-26
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	http://www.minken1975.com/publication/IE_B07201703.pdf

ジャワ研修(ガムラン演奏と舞踊)2017報告

ーインドネシア国立芸術大学 ISIスラカルタ校における授業&公演等ー

Report of training (Gamelan and dance) in Java 2017 - Classes at the Indonesian Institute of the Arts (ISI) Surakarta and performances etc.-

木村佳代 KIMURA Kayo
樋口文子 HIGUCHI Fumiko
針生すぐり HARIU Suguri

2017年8月6日から11日にかけて、インドネシア共和国中部ジャワ州スラカルタ Surakarta (=ソロ Solo) 市の国立芸術大学 Institut Seni Indonesia (ISI) において、本学学生や社会人講座生らが参加するガムラン演奏とジャワ舞踊の研修が開催された。今回は、演奏4クラス、舞踊4クラス計8クラスの授業や個人レッスン、インタビューが5日間にわたって行われたほか、大学やマンクヌガラ Mangkunegaran 王宮における舞踊と演奏の公演、影絵芝居ワヤン Wayang 公演の鑑賞会等が催された。この報告書はそれらの内容を記録したものである。

キーワード: インドネシア Indonesia、ジャワ Java、ガムラン Gamelan、舞踊 Dance、研修 Training

1. はじめに

本学学生及び社会人講座生が参加する「ガムラン現地研修」は、1990年代より断続的に行われている。近年は2012年、2014年に行われ2年に1回の開催を目指してきたが、2016年は情勢不安ゆえに見送られた。今年も開催が危ぶまれたが、参加希望者からの熱い声に押され、また今回初めて本学における「ガムラン短期留学プログラム」として認められたことにより実行に至った。もちろん、本学学生参加者には大学指定の旅行保険を義務づけるなど細心の注意を払った。他にも他大学の学生(沖縄県立芸大等)や様々な年齢層の社会人の方々が加わり総勢50名近くが参加、計画された講座やイベントが全て滞りなく行われ、好評の内に終了した。全国のガムラン愛好者たちの良き交流の場ともなった。

今回も樋口を中心とした筆者3名で企画・実行に携わり、現地に同行して通訳等を行いながら研修全般を見守った¹。そこで、今回の研修内容を筆者3名で分担しつつ報告したい。

研修が実施されたのは、2017年8月6日（日）～11日（金）の約1週間である。インドネシア国立芸術大学 ISI スラカルタ校にて、7日～11日の5日間、ガムラン合奏授業15回（入門、初級、中級、上級の4クラス）と舞踊クラス15回（舞踊別4クラス）、他に希望者による個人レッスンのべ37回が行われた。また、6日夜にはマンクヌガラ王宮にてディナー付き特別公演鑑賞会（舞踊と演奏）、7日夜にはマンクヌガラ王宮スタイルによる影絵芝居ワヤン鑑賞会、9日夜には国立芸術大学のイベント会場にて、今回の研修の先生方による公演鑑賞会（模範演奏と舞踊）があり、10日にはオプションとして同大学美術学部にてジャワのろうけつ染めパティック製作ワークショップが開かれた。最終日11日には先生方への感謝の気持ちを込めた食事が開かれ、最後には全員で踊り歌うなど大いに盛り上がった。以下個別に研修の内容をまとめた。

2. ガムラン合奏授業

ガムラン合奏授業は、入門クラス3回、初級クラス3回、中級クラス4回、上級クラス5回（1回90分）の計15回行われた。参加者には複数の授業参加を認めたため、レベルの高いクラスにも積極的に参加し経験を深めた方も多く見られた。以下に、それぞれのクラスの授業内容を記す。

2-1. 入門クラス（3回）

指導者：ルスディヤントロ Rusdiyantoro、ダニス・スギヤント Danis Sugiyanto

課題曲：①「マニヤルセウ」Lcr. Manyarsewu, sl.m.

②「サブ・ジャガ」Ldr. Sapu Jagad, pl.br.

参加者：約15名

[内容]

このクラスは初心者を対象とした課題曲を選んでいただいた。前回の研修同様にまず先生の手拍子を真似ることから始まった。先生が叩く速さと同じように叩く人、1拍おきに叩く人、先生の拍の裏に叩く人など、基礎のガムラン合奏で学ぶ拍の分担を、まず手拍子で行い導入した。合奏に入ると、何度も楽器を変わって繰り返した。①の曲を基本のテンポで学んだ経験のある受講者が多かったことから、今回は比較的早く次のテンポの段階を学ぶことになった。これは前回の研修と違うアレンジである。多くの楽器がテンポの変化に伴い奏法を変えることになり、初めてガムランに触れた受講者は多少苦勞したかもしれない。そのような時に先生方は、奏法の変わらない楽器に彼らを誘導し、アシスタントを配置するなどして合奏をつつがなく進めた。

②は彼らの状態を見て後半に先生が選んでくださった課題であるが、偶然に初級クラスの課題と重なり、両方のクラスに参加した受講生は十分に学習できたと思う。入門クラスとしては多少高度な内容であったが、スラカルタ様式におけるガムラン合奏の全体像をつかむために、このような選曲も有意義だと感じた。

2-2. 初級クラス (3回)

指導者：スラム・リヤディ Slamet Riyadi、スギミン Sugimin

課題曲：①「トゥマダ」Ktw. Tumadhah, pl.nem

②「サブ・ジャガ」Ldr. Sapu Jagad, sl.m.

参加者：約 15 名

[内容]

ガムランを始めて2年目以上の初心者にはふさわしい課題曲として、クタワン Ketawang やラドラン Ladrang 形式²の小曲をリクエストした。「トゥマダ」は道徳的な内容の歌が付いた、おそらく戦後に作られた曲。クタワン形式の太鼓の奏法、ボナン Bonang³と呼ばれる楽器のミピル Mipil 奏法の説明がなされ、参加者は交替で楽器に入り、練習が行われた。2曲目は、歌の無い「サブ・ジャガ」。ラドラン形式の太鼓の奏法とボナンの奏法が説明された。通常この曲の太鼓は、クندان Kendhang I と呼ばれる2人で組みになって演奏するスタイルが一般的だが、この授業では1人で奏するクندان II の奏法が採用され、テンポはイラマ Irama⁴から II に移行してそのまま終了させるというアレンジで指導された。この方が初心者にとっては演奏しやすく、彼らが短時間で学びながら合奏を行うには有効な方法であると感じた。

2-3. 中級クラス (4回)

指導者：バンバン・ソソドロ Bambang Sosodoro、スリ・エコ・ウイドド Sri Eko Widodo

課題曲：①舞踊曲「ゴレ・スリルジュキ」Golek Sri Rejeki (Ldr. Sri Rejeki, pl.nem)

②舞踊曲「ゴレ・マニス」Golek Manis (Ldr. Manis, pl.br.)

参加者：約 15 名

[内容]

このクラスでは舞踊伴奏曲を教えていただいた。若い有望な先生方の惜しみない教授に受講生が一生懸命に取り組む姿が印象的であった。

①も②もテンポや強弱の変化に富む作品である。まず先生が基本のメロディーであるバルンガン Balungan を白板に書き、受講生が写す。バンバン先生から、舞踊入場の際に使う最初の部分は、舞踊家が舞台中央に到着するまで何度でも繰り返すこと、舞踊家が到着したらすみやかにテンポを落として踊り始められるようにすることなどの注意があり、スリ・ウイドド先生が太鼓を叩いてくださり何度も合奏した。先生方が代わる代わるボナン奏法の特殊なところを更に白板に書く。イラマ I と II のミピル奏やオクターブ奏のグンビャン Gembyang 箇所、ふたりで交互に音を紡いで短いフレーズを繰り返すインバル Imbal、インバルの途中大事な音に向かう華々しい旋律形スカラン Sekaran など、1曲のなかにさまざまな奏法が混在し、演奏者は舞踊独特の揺れるテンポに沿いながら太鼓奏者の指示に従い、然るべき箇所奏法を変化させていかねばならない。受講生は担当する楽器を交代しながら、変化する部分を何度も繰り返し練習した。

最後の授業で先生方は同じくゴレの伴奏曲として②を体験させたいと仰り、時間の許す限りということで急ぎ教えてくださいました。帰国して更に勉強するための課題として与えてくださったもので、ボナンの奏法が特殊なミピル奏であるため、それらを白板に書いて説明した。合奏の練習をする時間はほとんどなかったが、課題の与え方として大変興味深かった。全体で4回の授業であったが、先生方が駆け足で与えてくださった課題は魅力的で、特に②は①で得た知識やテンポ感をそのまま活用できる部分と全く新しい課題が程よく混在していた。これらを持ち帰り、社会人講座の後半で楽器を交代しながらじっくり練習し、その成果は年度末の発表会で2曲とも披露することになった。

2-4. 上級クラス (5回)

指導者：スカムソ Sukamso、スウィトラディオ Suwitoradya

課題曲：「クトゥ・マンガン」 Gd. Kutut Manggung, mg. Ldr. sl.m. /pl.br.

参加者：約15名

[内容]

課題曲の「クトゥ・マンガン」は、本学社会人講座上級クラスの今年度の課題曲である。ガムラン界では誰もが知る古典の名曲であり、テンポやアレンジを自在に変化させて女性の美しい歌声を聴かせる曲として、現在でも盛んに演奏されている。今回の研修の上級クラスでこの曲を選曲したのは、この曲で歌われる様々な歌を現地の先生に発音から指導していただきたかったのと、この曲ならではのアレンジを教わりたかったからである。曲が長いので授業も5回にわたり行われたが、内容はとても充実したものであった。太鼓やボナンの奏法の説明、歌や胡弓ルバブ Rebab の奏者へのアドバイスの他、戦後ナルトサブド Nartasabda⁵ によって作られた歌の説明、更には元々スレンドロ Slendro 音階であるこの曲をペログ Pelog 音階に移調して演奏する方法についても指導された。指導内容は多岐にわたり、各パートの奏法のみならず参加者の質問を受けて、たとえばガムランの形式とは何か等、ガムランの基本に立ち戻るような説明もあった。

それらに加え、特に印象的だったのはメイン指導者であるスカムソ氏の指導姿勢であった。元来、ガムラン演奏家は技法等についてあまり多くを語らないものである。芸は習うのではなく、盗んで自分で構築していくものであると考えられていた。しかし、時代と共に伝統的な演奏を聴く機会が減りつつある中、大学等教育の場でしっかりと技術継承していかなければならないとの意識が演奏家の間でも芽生えたのであろう。スカムソ氏も授業中何度も、「私には何の秘密もない、全てをわかりやすく説明して伝えたい」との信念を語っていた。また、自身のガムラン観として「ガムラン音楽の正解は一つではない、色々なアレンジや奏法が可能な、自由な音楽である」とも語っていた。授業中には、スカムソ氏が尊敬し先頃亡くなられた演奏家の作品について涙ぐみながら語る場面もあり、参加者からは内容は難しかったが先生の優しさに打たれたという感想もいただいた。そのように現地の先生の人柄やガムランに対する信念に直接触れることができるのも、現地研修の醍醐味だと感じた。

3. ジャワ舞踊授業

舞踊の授業は、舞踊別に4クラス、各3～4回ずつ行われた。レベルに関わらず全クラスに参加した受講生がほとんどで、今回は指導者が2名ずつ付き手厚い指導により日に日に人数が増える（楽器の空き時間を利用した見学者も多かった）という状況となった。

以下に授業内容について大まかに述べる。

3-1. Aクラス（4回）

指導者：ハダウィヤ・エンダ・ウタミ Hadawiyah Endah Utami、
スリ・スティヤアセ Sri Setyaasih

舞 踊：「ガンビヨン・ガンビルサウエ」 Gambyong Gambirsawit

参加者：約10名

[内容]

今回は、ジャワでも今なかなか踊られることのない、ゆったりとした長大なガンビヨンに挑戦した。ガンビヨンとは、女性の美しい仕草や軽やかな動きを太鼓の明るく賑やかなリズムと共に表現するもので、現在でも結婚式などで盛んに踊られている。本曲は70年代頃それまでのフリーなアドリブの多い舞踊をある程度形にして練習するために作られたもので、当時のガンビヨンの形を残した古典曲である。

昔は演奏の興が乗るといつまでもそれに合わせて踊っていたものようであるが、今では現代の感覚に合わせ、速く短い、しかも決められた振り付けのものが主流となっており、今回の曲を課題とするに際し、指導者もしばらく踊っていないものであったため確認のため何度か事前にやり取りを行う必要があった。指導のハダウィヤ氏、アセ氏共に長く踊りを指導されて来て、勿論この曲も「昔は」踊ったことのあるものだということであったが、外国人である我々が挑戦するものとしては長大で複雑なため、少なからず意外な課題曲であったようだ。

しかし、一旦指導に入ると、思い出されることが多くあり、数回の授業の中で、過去の偉大な踊り手について、また今まで見たことのない振り付けなどについて様々な話を聞くことが出来、双方にとって実り多い授業となった。更に、事前に相談してあった振り付けに関しても細かく手を加え、豊かな記憶とともに往時盛んであったろうガンビヨンが甦ってくるのを目の当たりにすることが出来、受講生にとってジャワ舞踊の奥行きが感じられた授業であったと思われる。

指導者による舞台での演舞でも、その数日の成果が発揮され、さらに内容が豊かになったガンビヨンに感動を覚えた受講生が多く、今後繋がる何かを得たと実感できる数日間となった。

3-2. Bクラス（4回）

指導者：ドゥイ・ラフマニ Dwi Rahmani、

テレジア・スリ・クルニアティ Theresia Sri Kurniati

舞 踊：「ゴレ・スリルジュキ」 Golek Sri Rejeki

参加者：約 10 名

〔 内容 〕

ゴレは、本来はジョクジャカルタ Yogyakarta 市（今回研修に行った地域に隣接）で盛んに踊られている長大な女性舞踊で、研修地のソロ市では 70 年代以降アレンジが加えられ、主に初心者向けのわかりやすく短い作品として現在も踊り継がれている。

今回は、事前に指導しておいた内容を指導者が膨らませてゆったりと複雑な動きも加え、最終的には大人が踊っても十分に踊りを堪能できる作品となった。また、指導者 2 名共に楽器への造詣も深く、楽器を受講していない受講生に関しても、数をカウントして教える以外に、口で太鼓のリズムをそっくり真似してより細かいリズム取りを行うなど、曲への理解を深めようと努力され、踊りと楽器の緊密な関わりを感じる事が出来た。

指導者 2 名はそれぞれに踊りの雰囲気や微妙なアクセントが異なり、完全に揃えるための踊りではなく、それぞれに個性のあつて良い、ということを受講生に伝える良い機会ともなったと思われる。

今回の授業の目的はもう一つ、基本をきっちりと確認するという事でもあったが、こちらの意図をよく飲み込んでくださり、立ち方、走り方、手つき足つきなどについて細かく指導を行い、さらにどうしてもオンタイムになりがちな「拍感」を、ガムランの持つ後ろに伸びるゆったりとした感覚へ向ける指導も行なわれ、またそれが大事なことであったということを受講者の演舞によっても知ることが出来た貴重な機会となった。

また、事前に振りを全て練習していたことでその後の変更によって混乱が出るのではないかと危惧していたが、受講生には特に負担はなかったように思われ、バリエーションについて学ぶ良い機会ともなった。

3-3. C クラス (4 回)

指導者：ヌルヤント Nuryanto、ハルタント Hartanto

舞 踊：「グヌンサリ」 Gunungsari

参加者：約 10 名

〔 内容 〕

今回は、舞踊講座始まって以来の仮面舞踊の講習となった。仮面を掛ける舞踊は、まずその曲の振り付けに習熟していないと難しいものがあり、さらに物理的に仮面を掛けることによる肉体的な不安定さを長い修練によって克服しなくてはならないものである。受講生はまず事前に練習を重ねて臨んだが、指導者によって、最初の 2 日は仮面を掛けず全体を通して振りを確認し、残りは指導者も仮面を掛けて指導することでより目標とそれぞれの課題をはっきりさせるという内容となった。今回は 2 人体制の指導により、仮面を掛けてデモンストレーションする指導者と、それを見ながら受講生の振りを直す指導者と分けて授業が行われ、参加者も非常に熱心

に練習を行った。

踊りの内容としては、若い王族の男性が好きな女性のことを思い浮かべて身繕いする、というもので、2枚目の明るく闊達でノーブルな若い男性を演じるため、役というものを考える必要がある。男女ともに踊れる演目であるが、女性の場合はまず男性を演じる、そしてそれぞれの体格などの制約を超えなくてはならない。今回受講生はまだ覚えきれていない振り仮面にとらわれてなかなかキャラクターを演じるというのが難しいところであったが、指導者が身をもって示すキャラクターに自然に引き込まれ、それぞれ課題を見つけての帰国となった。

また、指導者2名のキャラクターが対照的（正統／創造性溢れる）であったため、踊りのバリエーションと可能性を知る良い機会となり、ジャワ舞踊の可能性・自由さについても造詣を深めることが出来た研修であった。

3-4. Dクラス (3回)

指導者：ドゥイ（女性）、ヌルヤント（男性優形）、サムスリ Samsuri（男性荒型）
舞踊：「ラントヨ Rantaya」（女性、男性優形、男性荒型）
参加者：約10名

[内容]

今回の研修において、普段じっくり指導できないが非常に重要な基礎について学ぶ、開眼する、という目標をたて、短い時間ではあるが基礎のみをみっちり練習する機会を設けた。内容は単純に、歩く、座る、走る、基礎の手の動き、といったものであったが、受講生からは非常に大事な機会であったと後から感想を多くいただいた。また、普段舞踊を履修していない受講生の参加・見学も多くあり、舞踊曲を演奏する機会も多いため参考になったのではないかと思われる。

指導者も、普段大学で行わない授業であるため（基礎はほぼ習得していると思われるため）、現地の学生についても普段から思うところがあるのか非常に熱心に細かいところまで指導を行い（特に姿勢、拍の取り方について）、得難い機会となった。

4. 個人レッスン

研修では毎回、希望者のみガムランの特定のパートを学ぶ個人レッスンを実施している。合奏授業だけでは習得不可能な難易度の高いパートを学ぶためのものである。今回は14名の希望者によりのべ37回のレッスンが行われた。レッスン対象の楽器は、ボナン、ルバブ、太鼓チブロン Ciblon、琴シトゥル Siter、竹笛スリン Suling、そして女声の独唱シンデン Sindhen と男性の斉唱ゲロン Gerong である。また、論文執筆のためのインタビューも行われた。

ガムランの各楽器の習得は、本来パート譜のような楽譜は使用せずに見よう見まねで覚え、記憶の引き出しを増やしながらいながら奏法を体で身につけていく方法を基本とする。

ただ、今回の研修のようにごく短期間で学ばなければならない場合は、楽譜を使用せざるを得ない。まず先生が用意してくれた楽譜を頼りにしつつ、目の前の先生の演奏を真似しながら必死で付いていく、という方法をとる。それだけでは不完全で、やはり帰国後も自主練習を続けることによって、始めて身につくというものであろう。それでも、現地の先生方の演奏する姿を間近に見ながらのレッスンは、やはり日本には得られない体験である。どの先生方も、何度も同じフレーズを繰り返しながら根気強く指導してくださった。また、必ず横で骨髄旋律バルンガンを叩いたり、別の楽器で合わせたりして、他のパートとの関係を意識させながらレッスンを進めることも多かった。合奏が主体であるガムランにおいては、個人レッスンにおいても他のパートとの関係を常に意識させながら行うことが大切だとあらためて感じた。

5. 公演鑑賞会等

5-1. マンクヌガラ王宮の特別公演鑑賞会（舞踊と演奏）

日 時：8月6日（日）18:30-21:00

場 所：マンクヌガラ王宮プンドポ Pendapa（吹き抜けの大広間）

演 目：演奏「シリル・バンテン」 Gd. Silir Banten, pl.br.

「シトマルドウォ」 Ktw. Sitamardawa, pl.br.

「タルポロ」 Ktw. Tarupala, sl.m.

舞踊「ブドヨ・ブダマディウン」 Bedhaya Bedhah Madiun

「ゴレ・モントロ」 Golek Montro

「クロノ」 Kelana

[付記]

宮廷内でディナーを味わい、その後プンドポに移動して演奏と舞踊を鑑賞した。大理石の床、高い天井に吹き抜けの建物プンドポは、ガムランが美しく鳴り響く空間であり、現地で生演奏を聴く醍醐味が味わえる。特にマンクヌガラ王宮のプンドポは、ガムランがもっとも美しく響く場所として定評がある。舞踊は趣きの異なる3演目が披露された。特に女性宮廷舞踊ブドヨ・ブダマディウンは7人で様々なフォーメーションを組みながらたゆたうがごとくに踊られ、宮廷舞踊の神髄を堪能できた。

5-2. 影絵芝居ワヤン・クリ鑑賞会

日 時：8月7日（月）18:00-22:00

場 所：マンクヌガラ王宮附属ワヤン専門学校 PDMN

題 目：「ワフユ・マクトロモ」 Wahyu Makutharama（前半部分抜粋）

ダラン Dalang（人形遣い）：ハリ・ジャルウォ・スラルソ M.Ng.Hali Jarwo Sularso

[付記]

ユネスコの世界無形文化遺産にも登録されたワヤン・クリ kulit（水牛の皮の透かし彫り人形を使用した影絵芝居）は、現在でも村のお清めやお祓い、結婚式や独立記念日等の儀式で盛んに上演されている。伝統芸術である反面大衆芸能としての要素も色濃く、時代と共にその様相は変化していった。近年では、物語をとうとうと語るシーンは短縮化され、その分観客が喜ぶ歌謡ショーや漫談の時間が増幅している。一方、クラシカルなワヤンを好む通の間では、伝統的なスタイルのワヤンを現代に復活させようとする動きも見られる。今回の研修でも、クラシックで味わい深いワヤンを観ていただきたく企画した。

PDMN (Pasinaon Dalang ing Mangkunegaran の略) は、マンクヌガラ王宮付属のワヤン専門学校である。同王宮スタイルのワヤンを上演できる人形遣いダランを育てている。ここ数年生徒の減少等により存続が危ぶまれていたが、同スタイルを次世代に残したいと願う人々の努力によって、最近では体制が整えられ模範ビデオが続々と出版されるなど勢いを盛り返しつつある。今回のダラン（人形遣い）は、同王宮スタイルの伝統的なワヤンを現在ただ一人上演することのできるハリ・ジャルウォ・スラルソ氏。息子で太鼓奏者のスジャルウォ・ジョコ Sujarwo Joko 氏の協力により上演が実現化した。

演目は、インドの二大叙事詩の一つ「マハーバーラタ Mahabharata」を題材とした「ワフユ・マクトロモ」。「ワフユ」は「天啓」「神の啓示」を意味する。「ワフユ」を題材としたワヤンの物語は数多くある。この演目ではジャワを支配することのできる「ワフユ・マクトロモ」をめぐる、いとこ同士のパンダワ Pandawa 勢とコラワ Korawa 勢の争いが描かれる。実際のワヤンは夜9時頃から翌朝4時頃まで延々7時間あまり上演されるが、今回は研修スケジュールに合わせて、上演前の祈りの儀式に続き、前半部分を3時間ほど演じていただいた。短縮版としてハイライトシーンのみをつなげて最後まで上演する方法もあるが、今回は通常の進行で前半部分のみ上演していただいたため、物語はゆったりと進行した。とかく派手でスピーディーな現代風ワヤンと異なり、ハリ氏のワヤンは見せ場の一つ、軍隊出陣のシーンにおいてもたっぴりと時間をかけてそれぞれの人形の個性を存分に見せてくれた。わずかな動きでも香り立つような人形さばきにすっかり魅了された。会場はワヤン学校の教室で、研修参加者がちょうど全員座れる位の程良い大きさ。ガムランも古来の姿である中編成（ボナン等が無い）で同王宮スタイルによるアレンジで演奏された。研修のような名目で上演依頼しなければ普段はなかなか目にするのでない、貴重な体験であった。

5-3. 国立芸術大学 ISI スラカルタ校講師陣による模範演奏&舞踊公演鑑賞会

日時：8月9日（水）19:00-22:00

場所：国立芸術大学 ISI スラカルタ校プンドボ

演目：演奏・「サプ・ジャガ」 Ldr. Sapu Jagad, sl.m.

舞踊・「ゴレ・スリルジュキ」 Golek Sri Rejeki

演奏・「タルポロ」 Ktw. Tarupala, sl.m.

・「マニヤルセウ」 Lcr. Manyarsewu, sl.m.

- 舞踊・「ガンビヨン・ガンビルサウエ」 Gambyong Gambirsawit
- 演奏・「ドラナン」 Dolanan 集（「クンバン・ジャグン」 Kembang Jagung, sl.9/
「ワジベ・ダディ・ムリ」 Wajibe dadi murid, sl.9/
「ドゥンドゥン・クンティン」 Dhendheng Kenthing, sl.9)
- 舞踊・「グヌンサリ」 Gunungsari
- 演奏・「ミンタセ」～「カルナン・セ」 Gd. Mintasih – Ldr. Karnan Sih, pl.br.
・「クトゥ・マングン」 Gd. Kutut Manggung, sl.m.

[付記]

研修では毎回、先生方に各授業の課題曲の模範演奏や踊りを中心にした公演を依頼している。研修参加者は特別にステージに上がり、楽器のすぐ近くに座ることが許されている。先生方が演奏する姿を間近に見聞きすることができる、またとない機会である。本番では、同じ課題曲であっても授業やレッスン時に指導された初心者向けの易しい奏法のみならず、プロならではのひねりの効いた難易度の高い奏法も惜しげもなく披露される。先生方のそのような姿を見ると、習ったことが出来たから終わりではなく、その先にまだまだ追求すべきことがたくさんあることにも気付かされるであろう。また今回も、本学卒業生でありジャワで長年にわたりシンデン（女性の歌手）として活躍している狩野裕美さんに出演していただいた。日本人ながら透き通るような美しい歌声に魅了された。

舞踊に関しては、事前に大学より「踊り手は、本来の肌を出す衣装で踊る見目麗しい若手か、あるいは衣装は簡素でも構わないので年配のベテラン方に頼むか、どちらが良いか？」と聞かれ、迷わずベテラン勢に頼むことにした。結果は大成功であった。授業で習う先生方の中には普段はもうあまりステージに立たない方もいらっしやるので、絶好の機会であった。たとえば「ゴレ・スリルジュキ」は通常若い女性によって踊られるものであり、年配の踊り手によって踊られることはまずない。女性舞踊は2種あったが、衣装は簡素とはいえ、よく考えられたシックな衣装で、しっとりとした息の合った踊りは、長年の鍛錬の成果を感じられ、またベテランといってもまるで少女のようにチャーミングで、かつなかなか味わい深いものであった。貴重な舞台を見せていただいた。

5-4. ジャワのろうけつ染めバティック・ワークショップ

日 時：8月10日（木）16:00-18:00

場 所：国立芸術大学 ISI スラカルタ校美術学部校舎内

[付記]

近年新設された別キャンパスにて、今回初めてジャワのろうけつ染めバティックの体験ワークショップが行われた。用意されたハンカチほどの大きさの布に溶かしろうで絵を描き、染色液に漬けてろうを取ると手描きの染色が出来上がる。2時間弱で次々と個性的な作品が完成し、参加者も大満足であった。ガムランや舞踊、ワヤンとも関わりの深いジャワのもう一つの伝統、バティック製作の一端を体験することができた。

6. おわりに

今回も 50 名近くの参加者と共に、大変有意義な時を過ごすことが出来た。日本と現地双方で過去 2 回にわたりほぼ同じスタッフで改善点を確認しながら積み重ねていった成果が、十分に生かされていたのではないかと感じる。ただ、物価上昇を続けるインドネシアにおいて今後も限られた予算の中で充実した研修を行っていくためには、さらなる工夫も必要である。時代に即して柔軟に考えていきたい。

研修で得た様々な財産は、今後の授業や講座に生かしていきたい。各公演の記録映像は民族音楽研究所にて保管され、閲覧可能である。

最後に、アジア諸国の文化への関心が高まりつつある昨今、このような音楽研修が今後も安全にかつ充実した内容で計画・実行されることを願いつつ、方法論を引き続き模索していきたい。

文責：「1. はじめに」「2. ガムラン合奏授業（2 初級クラス、4 上級クラス）」

「4. 個人レッスン」「5. 公演鑑賞会等」「6. おわりに」＝木村

「2. ガムラン合奏授業（1 入門クラス、3 中級クラス）」＝樋口

「3. ジャワ舞踊授業」＝針生

注：

- 1 主催は、前回と同じく NPO 法人日本ガムラン音楽振興会（樋口、木村等が理事を務める）。
- 2 クタワン形式は 16 拍周期、ラドラン形式は 32 拍周期で節目のゴングが鳴る。長大な曲が多いジャワガムランにおいては小規模な形式であり、初心者～中級者用の課題曲としてふさわしい。
- 3 平置型コブ付き青銅製ゴング・チャイム。2 本のバチで 12～14 個ある玉のコブの部分を叩く。学生授業や社会人講座では、挑戦しがいのあるやや難しい楽器として人気が高い。
- 4 イラマ（ジャワ語ではイロモ）は速さの段階、拍の伸び縮みを表す。イラマ I は比較的速いテンポ、イラマ II はゆったりとしたテンポである。幾つか段階があり、1 拍の間にサロン・パヌルス Saron Panerus が何回打たれるかによって決まる。
- 5 ナルトサブド（1925-1985）は戦後に一世を風靡した影絵芝居ワヤンの人形遣い（ダラン）であり、作曲家としても数々の作品を世に残した。特に、古典曲に女声や男声による斉唱を付した新たなアレンジはその後のガムラン界に多大な影響を与え、現在でも盛んに演奏されている。

写真：



1 マンクヌガラン王宮の公演
(木村撮影 2017年8月6日)



2 ワヤンの人形遣い、ハリ氏
(樋口撮影 2017年8月7日)



3 国立芸術大学 ISI 公演 (舞踊)
(ISI撮影 2017年8月9日)



4 国立芸術大学 ISI 公演 (演奏)
(ISI撮影 2017年8月9日)



5 ガムラン合奏授業入門クラス
(木村撮影 2017年8月11日)



6 ジャワ舞踊授業 B クラス
(ISI撮影 2017年8月11日)

This is the report of the training of Gamelan and Java dance which was held at Institute Seni Indonesia (ISI) in Surakarta, central Java, Indonesia from 6th of August to 11th. The participants were students and adults. Some of them are learning Gamelan in Tokyo College of Music. There were 4 classes of Gamelan, 4 classes of Java dance, some private lessons and the interviews for teachers. During the training, we have enjoyed Gamelan concerts, dance performances, and Wayang at some places, such as ISI and the Palace of Mangkunegaran.

本研修報告は、東京音楽大学附属民族音楽研究所 2017 年度フィールドワーク費助成を受けたものです。
(木村、樋口：本学講師 [ガムラン] 針生：同 [ジャワ舞踊])